

行に令し、領内諸城・館跡に關する凶人の傳聞を記録上進せしめたものである。

ゴジヨウノツボネ 五條局 加賀藩主三代前田利常の側室。佛光寺門跡經海僧正の女。後に藩臣生駒直方に下嫁した。

ゴジヨウノラン 五條の亂 文久三年九月朔日加賀藩は大音厚義を京師に遣つて陛下を守らしめたが、十二日傳奏は厚義を召して兵を河内に出さしめた。是より先浪士松本謙三郎等、大和の五條に據つて叛したが、未だ平定せざるを以てこの命があつたのである。厚義乃ち兵六百を率ゐて丹南郡平尾村に屯し、十九日賊平ぐに及んで京に歸つた。

コシヨウマチ 小將町 金澤の町名。元祿六年の土曜に、小姓柴町或は御小姓町とあるから、此の時代は斯くの如く呼んだものである。舊傳に、前田利常の頃は小姓組の諸士を此の地に集め置いて、小姓頭脇田九兵衛以下組の人々に邸地を賜はつた。故に御小姓町或は小姓柴町と呼び、更に小姓町と呼んだといふ。小姓に小將の字を用ひた後、町名も亦小將町となつた。

ゴシヨノゲンベエ 御所の源兵衛 河北郡御所村の人。源兵衛十村を命ぜられたが、寛永十四年老齢を以て、子長次郎その職を襲ぎ、慶安三年また名を源兵衛と改めた。前田利常領内に改作法を施した時、二代源兵衛その事に與り、寛文元年持高の内一町六十歩を扶持せられて御扶持人十村となつたが、延寶三年十二月病死し、翌年その子長次郎御扶持人十村の職を襲いだ。

ゴシヨノタチ 御所の館 江沼郡二口の内にある地名。昔京都から三寶院が下國居住し

た所といひ、その家臣今村上總・湯淺下野といふ者の居住地は今に上總田・湯淺田といふと傳へてゐる。

コシラヤマ 小白山 小白山は白山の別山をいふ。白山記に『小白山御躰、長瀧寺龍明房勸進五尺金銅像』といひ、又加賀馬場のことを言うて、『三所權現御寶殿、依爲本馬場奉造替之處。小白山御寶殿計、越前馬場類申請之聞、近比被遊渡之』ともある。

コシラヤマジンジャ 小白山神社 ↓ラガハシラヤマシヤ 小河白山社。

ゴジリタニザカ 小尻谷坂 金澤尻垂坂の上から小將町に下る一條の坂路をいうたが、明治以後それと並んで別に坂路を開き、今は二條共に小尻谷と呼んでゐる。尻谷に對した名目であるが、小尻谷とも小尻垂とも書く。この附近を小尻谷町といふのは、維新後に初つた町名である。

コシロジンジャ 兒代神社 鹿島郡小田中に在つた。今白久志山御祖神社といふ。式内等舊社記に『兒代神社。小田中保小田中村鎮座。祭神奇稻媛命。一宮神幸有難儀之神事。舊社也』と見える。嘗て式内久志伊奈多伎神社たるを主張したことがあるが、何等據がない。

ゴシンカン 御親翰 藩侯から年寄中又は家老中に下す手掛をいふ。

ゴシンソウヤマシヨウ 御神造山城 河北郡町(部落名)の渡山にあつて、里人之を御神造城といひ、越中刀利村の左衛門之を築くと傳へる。左衛門は藤勇で、佐久間盛政之を攻めあぐんだが、遂に之を越中に走らせた。

コスガナミ 小菅波 江沼郡那谷谷に屬す

る部落。江沼志稿に、小菅波は大菅波と同じく、菅の大小を以て名とすといふのは附會である。この村名は古郷名の菅浪郷と相關係するものである。

コスギ 小杉 江沼郡奥山方に屬する部落。

コスギ 小杉 能美郡德橋郷に屬する部落。

コスギ 小杉 鳳至郡本江(今本木)の内の小字。

コスギ 小杉 鳳至郡七浦庄に屬する部落。

コスギイツシヨウ 小杉一笑 金澤の俳人。通稱茶屋新七、諱は味頼。もと梅盛の門人。後芭蕉の風を慕ひ、奥の細道の歸途を待つて相見えんことを欲したが、會病に臥し、父の十三回忌の爲に十三卷の歌仙を瀧尾した後、元祿元年十一月六日三十六歳を以て歿した。その追善集に西の雲がある。

コスギチカカス 小杉慎箇 通稱平太夫。源兵衛・喜左衛門。安永三年父半太夫慎之の遺知百二十石を襲ぎ、組外に列し、御勝手方。産物方御用を経て、天明二年五十石を加へ、御納戸奉行より遂に御留守番番に至り、文化二年五月六十三歳を以て歿した。

コスギチカユキ 小杉慎之 通稱半太夫。享保九年父安太夫の遺知七十石を襲ぎ、定番御歩となり、前田宗辰御附・御側小將横目から、延享二年組外に列して淨珠院御用人に進み、明和三年五十石を加へ、安永三年歿した。

コスギニシヨウ 小杉二笑 金澤の俳人。通稱茶屋新七。一笑の後で天明頃の人。一笑二世又は一笑末葉とも肩書する。

コスギヘツシヨウ 小杉ノ松 金澤の俳人。一笑の兄。元祿二年一笑の歿するや、芭蕉以下の追憶の句を集め、同四年之を刊行して西

の雲二卷とした。

ゴセイキ 午正機 加賀藩の學校から傳來した日時計で、今石川縣師範學校に藏する。砲に裝藥し、レンズを太陽の高度と緯度とに合はせ置けば、發砲によつて正午を報する裝置のものである。

コセキブンチヨウ 古蹟文徵 前田綱紀が人を諸國に遣はして蒐集した勅旨・令旨軍令・訴狀・判物・古文・古歌・古書簡の類を影寫したもので、現に尙數千紙を存する。

ゴゼン 後川 ↓ワタヤゴゼン 綿屋後川。

ゴゼン 御前 御前とは藩侯、御前様はその夫人を意味する用例である。前田治脩が老侯重教に與へた書簡に『秋冷の初先以益御機嫌能成爲御座、誠以恐悅之至奉存候。御前様にも益御機嫌能成爲成御座、恐悅之至奉存候。然者御前御用向相勅申候頭共云々』とある御前様は重教夫人で、御前は重教をさすものである。しかし、御前様をゴゼンサマと訓めば勿論男子となる。小堀遠州が前田光高に與へた書に『御前様分別に過まじく候。これは光高をさしてゐる。』

ゴゼンザカ 御前坂 ゴゼ 金澤茨木町から本多町石浦街社地に通する坂路で、昔は社前への直道であつたから御前坂と稱したものである。今或は盲女坂と書いて種々の妄誕を附會するが探るに足らぬ。

ゴゼンザカ 御前坂 白山の頂に在る。越前名蹟考に『越前室より大御前の社まで八町を御前坂といふ。燒崩れたる石道なり。昔其内にじやわうといふ所あり。藏王權現を勧誘したる所なるべし。千引の岩屋として窟あり。神代に大神宮の御出生の岩屋と云傳へたり。』